

旧新潟市からの「満蒙開拓団」

「新潟村開拓団」142戸500人入植新潟市は県の要請を受け、1942～43年(昭和17・18)の「大陸帰農開拓団」200戸を募ることになりました。「大陸帰農開拓団」とは、戦時下の軍需生産優先統制や節約が要求されるなか転廃業や失業に追い込まれた中小商工業者を、満州で農業に従事させようというものでした。

この開拓団は「新潟村開拓団」と呼ばれ、入植地は、錦州(きんしゅう)省盤山(ばんざん)県二道橋子(にどうきょうし)でした。この地域はすでに満州や朝鮮の人々の耕作地や家だったものを「満州拓殖会社」がタダ同然で買収したものでした。現地はすでに灌漑施設が整備されていました。新潟市から移民が次々に送り込まれ、昭和20年6月には142戸、500人ほどになり、9部落に分れ、国民学校もでき、校長も医者も警察官もいました。渡満前の入植地に説明では「気候良好、穀類野菜魚、鳥等豊富」と示され、1戸当たりの耕地は「水田4町歩、畑2町歩、5反歩」の配分とされていました。入植に当たっての補助として「渡航費その他として約1500円の政府補助並びに1戸当たり約3500円程度の低利資金の貸付ある」と好条件が示されていました。

しかし入植した1年目は稲作も直播きで収量も少なく、自分たちの食糧分にも足りなくて、満州拓殖会社から食糧の支給を受ける状態でした。電灯も一部にしかありませんでした。

「満州に行けば兵隊にとられない」といわれていたのに、昭和20年に入ると、開拓団にも次々と召集令状が来て、働き手の男子団員の72%が兵隊にとられ、開拓団は女性と子ども、お年寄りだけになりました。この状態で8月15日の終戦を迎えました。

ソ連軍や匪賊の襲撃、略奪の危険が現実のものとなり、8月19日から団員全員による逃避行が始まりました。太窪(たち)から砥用(ともち)の開拓団を経て9月16日には鯉城(りじょう)へと逃げのび、そこで越冬しました。生活のために働ける団員は苦力(クーリー)の群れに入って働きました。逃亡中に死亡した人、略奪された人、食糧がなくて子どもを泣く泣く中国人に渡した人もいました。冬の間にさらに幼児ら55人が

死にました。昭和21年6月、葫蘆(ころ)島より出発して日本にたどり着いた者は、次の通りです。

終戦時団員数	応召者	死亡	残留・不明	帰還
658	61	68	3	587
566	45	61	3	502



新潟村開拓団関係地図
(「新潟市史」より)



新潟港から満蒙開拓団員を乗せて出港する満州丸

(写真は『新潟市史』通史編4より)

新潟市からの満蒙開拓青少年義勇軍

昭和17年(1942)7月、新潟県と新潟市は「新潟県満蒙開拓青少年義勇軍渡満部隊の壮行会」を催しました。茨城内原訓練所に入所して3カ月の訓練を終え、7月4日に満州へ向かう新潟県出身者の部隊を盛大に送る行事でした。割り当てられた義勇軍参加目標の達成は学校の教師の任務でした。

新潟市へは宮浦・二葉の両国民学校高等科に、合わせて54人が割り当てられ、両校とも生徒の必死の勧誘に努力しました。内原訓練所と同じ教育方針で授業をしたり、合宿訓練もやったりしました。父兄懇談会を開き、父兄の説得にも努めました。